

K-510.

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第13集

白旗

米沢市教育委員会

白旗

発堀調査報告書

昭和60年1月

序 文

このたび、米沢市埋蔵文化財発堀調査報告書第13集「白旗遺跡」を刊行することになりました。この調査報告書は、米沢市農業協同組合の住宅団地造成事業に伴って、本市教育委員会が昭和58年7月に実施した、緊急発堀調査の成果をまとめたものであります。

今回の調査で白旗遺跡の全貌を解明したことにはなりませんが、この遺跡から縄文時代早期の遺物が確認され、羽黒川流域においても縄文時代早期前半における生活の拠点があったことがうかがわれます。

本市には、私たちの祖先が残した遺跡が数多くあります。素朴な人間性や豊かな心を取り戻してくれる埋蔵文化財を調査し保護保存を図っていくことは、先人たちに対する私たち現代人の礼儀ではないかと思います。本書が、学兄諸氏の研究活動に資することはもとより、市民皆様の埋蔵文化財に対する愛護精神の向上に役立つのであれば望外のよろこびであります。

最後になりましたが、この調査にあたりまして格段のご協力を賜りました米沢市農業協同組合と地元山上地区の皆様に心から感謝申しあげます。また、報告書作成にあたりまして格別のご指導とあたたかいご助言を載きました山形県考古学会副会長加藤 稔先生並びに関係各位に深く感謝申しあげます。

昭和60年1月

米沢市教育委員会

教育長 北日出郎

発刊に寄せて

わが農協が、白旗地内に小規模宅地造成事業を進めておりましたところ、唐突に市教育委員会より「埋蔵文化財分布調査により確認されている地区なので調査の要あり」と通告をうけました。ために直ちに工事を中断し、これに全面的に協力いたしました。

調査は、市教育委員会が主体となり、多くの調査員の方々により、炎天下精力的に探査され、なかに縄文早期の土器片、アメリカ型石塚などもあり、はるかなる先人の手によった文化遺産の出土がありました。これらは米沢市内各所の発堀業績と重ね「米沢考古学」の集大成のなかで、貴重なデータとなることであり、その成果に感慨ひとしほであります。市教育委員会事務局員及び作業員の方々に、心から敬意と感謝を表します。

わが農協は、永年米沢市全域の優良農地を守り、宅地によるスプロール化を防ぎ、秩序ある土地開発にむけ努力を続けております。農協は、これを契機に造成事業着手前に充分な配慮をもち、積極的に埋蔵文化財を守る運動に参加し、その使命を果すべきと決意を新たにいたしました。

なお今回は、農協にとって不測の出来事であった。よって今後広く市民に「遺跡分布調査地区」を周知徹底させる方途を、関係機関にのぞむところであります。

昭和60年1月

米沢市農業協同組合

組合長理事 油井寅太郎

例　　言

1. 本報告書は、米沢市大字三沢字白旗地内住宅団地造成に伴う取り付け道路敷地内の埋蔵文化財にかかる緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は米沢市教育委員会が主体となって、米沢市農業協同組合との協議のうえ実施したものであり、期間は昭和58年8月9日～同年8月31日までであった。
3. 調査体制は次の通りである。

調査総括 黒田信介

調査担当 手塚 孝

調査主任 菊地政信

同副主任 亀田吳明

調査員 橋口真紀、小松佳子、中島正己、門脇耕一、佐藤嘉広、岩見和泰

調査協力 加藤 稔、橋爪 健、山形県教育庁文化課、米沢市農業協同組合、まんぎり会

作業員 伊藤清美、鈴木芳徳、我妻徳枝、佐藤みよし、齊藤とく

事務局長 引地孝忠

事務局 木村琢美、金子正廣

4. 報告書内の遺構記号はHY—竪穴住居跡、DY—土壤、PY—ピット、KY—溝状遺構、TY—柱穴に一連通し番号を採用した。遺物はAZ—土器、BZ—石器とした。
5. 採図縮尺は、遺構を60分1、40分1、拓影図を3分の1、石器の実測図1分の1、1.5分の1とし、写真図版に関しては縮尺不同とした。北の方向は真北に統一した。
6. 遺構等の図化は、米沢市埋蔵文化財報告書第8集の基本図化表に沿っている。
7. 遺構等の土層については、「新版標準土色表」(小山、竹原1973)等を参考にした。
8. 本書の作成は、菊地を中心となって手塚と亀田が補佐した。編集は菊地が担当した。責任校正是、木村琢美、森谷幸彦が担当した。

本文目次

序文

例言

1. 遺跡の概要	1
2. 調査の経過	3
3. 層序	3
4. 遺構の概要	3
5. 遺物の概要	9
6. 石器	11
7. 土器	25
8. まとめ	25

挿図目次

第1図 白旗遺跡と周辺の遺跡分布図	2
第2図 白旗遺跡グリット配図	4
第3図 白旗遺跡遺構平面図	5
第4図 白旗遺跡土壤平面図	8
第5図 白旗遺跡遺構平面図	10
第6図 白旗遺跡出土石器実測図 (1)	12
第7図 白旗遺跡出土石器実測図 (2)	13
第8図 白旗遺跡出土石器実測図 (3)	14
第9図 白旗遺跡出土石器実測図 (4)	17
第10図 白旗遺跡出土石器実測図 (5)	18
第11図 白旗遺跡出土土器拓影図	19

付 表 目 次

第1表 白旗遺跡周辺の遺跡地名表	1
第2表 白旗遺跡出土石器形態分類表	20
第3表 白旗遺跡出土剥片分類表	20
第4表 白旗遺跡出土石器計測表	22
第5表 白旗遺跡出土剥片計測表	22

写 真 図 版

第一図版 白旗遺跡の発掘

- (一) 白旗遺跡発掘全影（西側より東側を望む）
- (二) 白旗遺跡発掘全影（東側より西側を望む）

第二図版 白旗遺跡の発掘

- (三) H Y12, 竪穴式住居跡
- (四) K Y13, 溝状遺構

第三図版 白旗遺跡出土の土器, 石器

1. 遺跡の概要

本遺跡は、米沢市大字三沢字白旗26110-7他に位置し、遺跡範囲の西南端を市道318号線が南北に走る。遺跡の発見は、1982年（昭和57年）の晚秋に米沢市教育委員会が実施した。米沢市全域に於ける、埋蔵文化財分布調査の際に確認された遺跡である。面積・約18,000m²を有する縄文時代集落跡として、米沢市遺跡登録番号「No170」白旗遺跡に登録された。

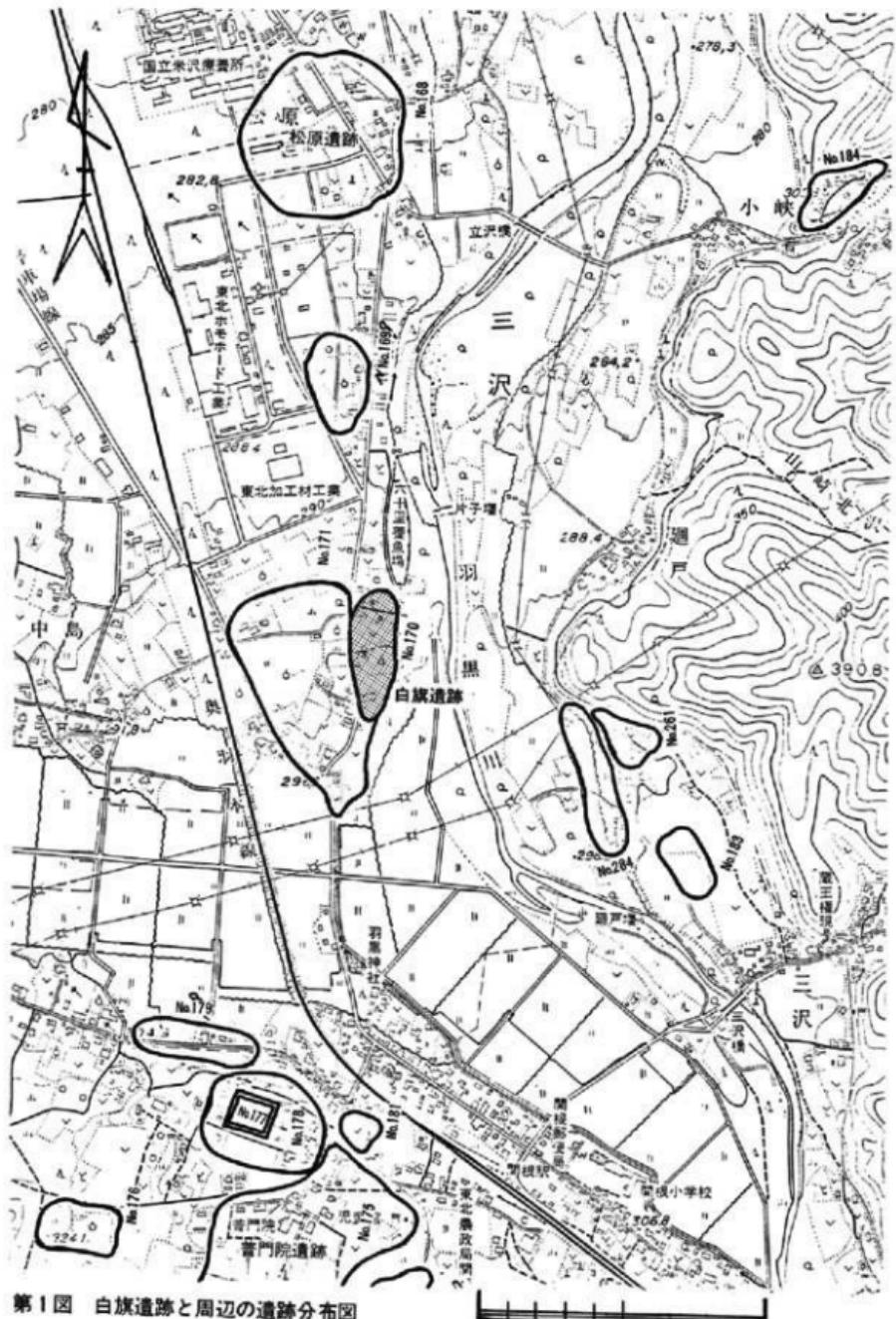
遺跡は、羽黒川によって形成された河岸段丘の左岸にあり、標高は294.4m～295.6mある。現況は、畑、果樹園が大半を占め、一部宅地として利用している。第1図で示した様に、この河岸段丘の両岸を選地した遺跡が多い。なを周辺遺跡の詳細については、第1表を参照願いたい。これらの遺跡群で、発掘調査が実施された松原遺跡、普門院遺跡について紹介しよう。

松原遺跡（第1図No168）は、1971年（昭和46年）8月に置賜考古学会の事業として行なわれた。1977年（昭和52年）に刊行された報告書には、縄文前期初頭の闘山式、柱島式併行の良好な遺跡として明記されている。調査区からは、2練の竪穴式住居跡が重複して確認されている。

普門院遺跡（第1図No175）は、水窪ダム西幹線水路関連遺跡の緊急発掘調査であり、米沢市教育委員会の委託を受けた、置賜考古学会が1974年（昭和49年）に実施した。同時に刊行された調査概報によると、縄文晩期の土器片と剝片類が記載されている。調査区からは、遺構は検出されなかった。その後、本遺跡より縄文前期、中期、後期の土器片が偶然に採集され、これらの事から、普門院遺跡は、大規模な複合遺跡であることが判明している。

第1表 白旗遺跡周辺の遺跡地名表

登録番号	遺跡名	所在地	立地	遺跡の状況	面積	種別	出土遺物	年代
No168	松原遺跡	米沢市大字三沢字松原	河岸段丘	畠・宅地・原野	75,600	集落跡	土器、石器	縄文前期初頭
No169	松原南遺跡	米沢市大字三沢字松原	河岸段丘	畠・宅地	17,600	集落跡	石器	縄文
No170	白旗遺跡	米沢市大字三沢字白旗	河岸段丘	畠・宅地	18,000	集落跡	土器片、石器	縄文早期～後期
No171	白旗西遺跡	米沢市大字開根	河岸段丘	畠・宅地	84,000	集落跡	土器片、石器	縄文前期
No175	普門院遺跡	米沢市大字開根	舌状台地	墓地・原野	88,400	集落跡	土器、石器	縄文前期～晩期
No176	普門院南遺跡	米沢市大字開根	舌状台地	畠・宅地	10,400	集落跡	石器	縄文
No177	喜多館遺跡	米沢市大字開根	舌状台地	畠・宅地	4,800	土 墓		中世の終末
No178	坊中遺跡	米沢市大字開根	舌状台地	畠・宅地	33,600	集落跡	石器、石器	縄文
No179	普門院西遺跡	米沢市大字開根	舌状台地	畠・宅地	12,600	集落跡	石器	縄文
No181	普門院北遺跡	米沢市大字開根	舌状台地	畠・宅地・墓地	4,900	集落跡	土器片、石器	縄文
No183	廻戸遺跡	米沢市大字三沢字廻戸	河岸段丘	畠・水田	7,200	集落跡	土器片、石器	縄文
No284	山崎遺跡	米沢市大字三沢字山崎	河岸段丘	畠・水田	12,500	集落跡	土器、石器	縄文



第1図 白旗遺跡と周辺の遺跡分布図

2. 調査の経過

本遺跡の調査は、米沢市農業協同組合が計画している同市大字三沢字白旗地内の住宅団地造成に伴なう取付道路敷地部分、緊急発掘調査として、1983年（昭和58年）8月9日から開始した。

調査対象となる、道路敷地の幅6m×長さ60mに沿ってグリットを配す。2m×2mを基本に6m×6mの範囲を各1区とした。西側より1区～10区を設定して、重機による表土剥離から着手する。なを道路付近は、清平によって地山が露出していることから、今回の調査対象外とした。

面整理を中心に1区から作業を進めた結果、1区、2区もすでに地山まで消平されていることが判明し、3区～10区を精査範囲に選定、調査を続行する。

その結果、3区II層面より、アメリカ型石蹴が検出された。8月19日には、4区、5区、10区に地層確認用の幅50cmトレンチを北側に配し、地山まで堀り下げる一方、8月23日までに遺構確認の精査を主体に行なった。作業が進行するに従って、4区～10区に遺構が存在することが判明。4区～6区に、大型溝状構造。8区の竪穴式住居跡。土壤、ビット群等を確認する。

その後、確認された遺構を中心に掘り下げ及び、遺物出土点図作成、遺構平面図作成を行ない30日のレベリング、写真撮影をもってすべての調査を完了する。8月31日に現地説明会を開き終了後に、発掘機材の撤去、遺物収納をおこなった。今回の調査面積は450m²、精査面積288m²であった。期間は8月9日～8月31日間の延べ22日間を要した。

3. 層序（第3図）

今回の調査対象となった地区は、段丘端の東側より道路に面する西側へ若干傾斜する地形を示す。この為東から西にかけて、堆積物が厚みを増す。層序は下記に大別される。

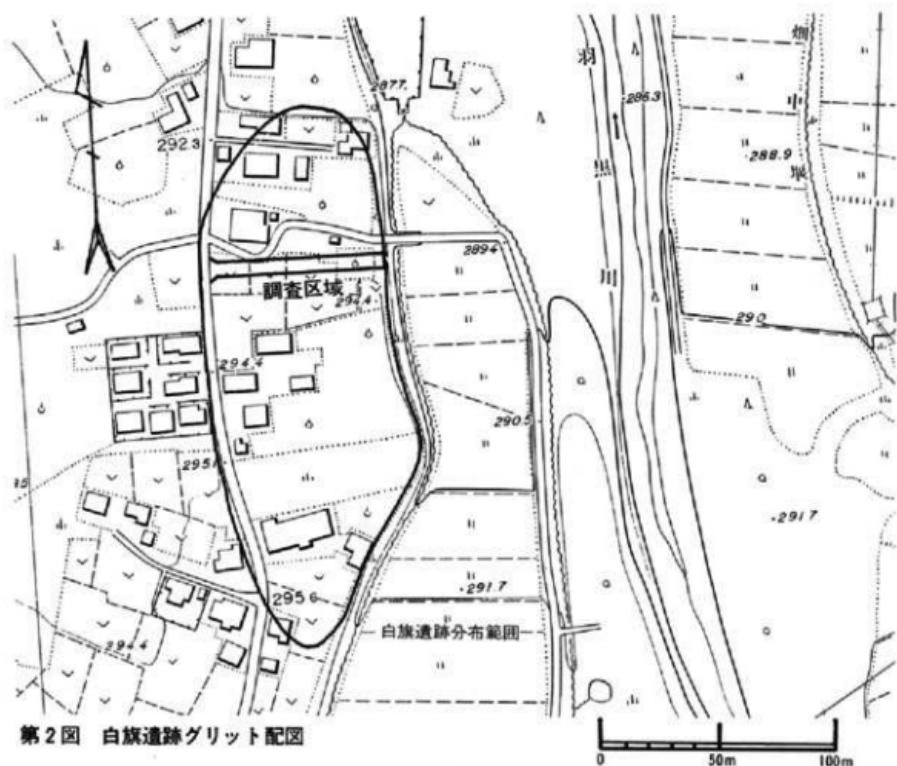
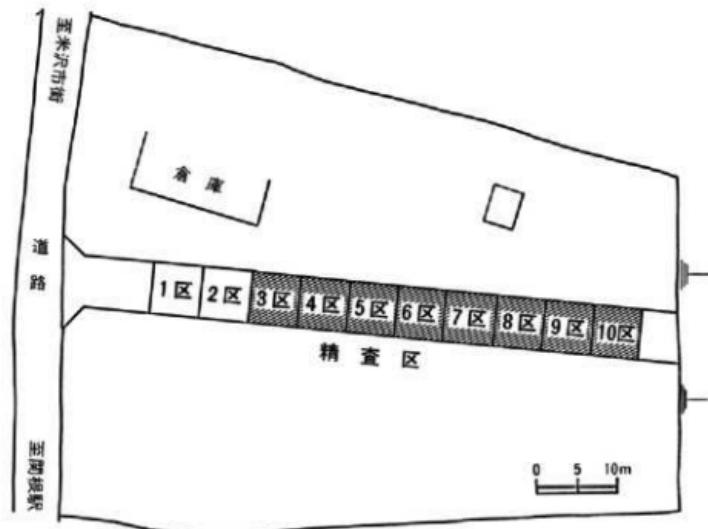
白旗遺跡層序	土色、注記	厚さ
第I層 耕作土	暗灰黒褐色土	(20～30cm)
第II層 微砂質土	暗黒黄褐色土 遺物を含む	(10～15cm)
第III層 微砂質土	黄褐色土 遺物を含む	(5～13cm)
第IV層 碓層	地山、多量の大形状礫を含む。	

地山の面に認められる、礫群は旧羽黒川の河原跡である。この事は、現在遺跡の東南を北流する羽黒川が、遺跡範囲の一部を流れていた時期があったことをうかがわるものと言えよう。

4. 遺構の概要

遺構の存在する層位は、II層、III層であり、II層はC群土器、大木9～10式、D群土器、堀の内I式、III層はB群土器、大木5式、A群I類土器、田戸上層式、A群II類土器、野島式が主体をなす。

検出された遺構は、溝状遺構1基、土壤6基、ビット群5基、竪穴式住居跡1棟、竪穴状遺構1基の計14基であった。次に、遺構群の詳細について述べる。



第2図 白旗遺跡グリッド配図

a. II層面遺構

・溝状遺跡〔第3図KY13, 第2図版〕

調査区の4区～6区にかけて分布し、最大幅5.2m、最短幅1.3m、最深部1.2m、最浅部は52cmである。底面は平坦であり、4区西側壁面はやや直角に立上る。

形態は、4区の南側より北東に延び、4区、5区にかけて湾曲し、6区の東南方向へと進路をとる。断面形態は、U字型を有し、西が深く、東に浅い。

覆土は自然堆積による8枚の層序が認められ、黒墨と呼ばれる土色が主体をなす。底面には多数の自然礫（安山岩が多い）を有す。4区西側壁面直下に集中する傾向を呈する。

遺物は、覆土のV層、VI層より縄文中期の土器片が3点出土している。この土器片は磨滅が著しく、風化している。

性格については、人工の構築によるものか、自然遺構なのかは不明と言わざるをえない。

b. III層面遺構

・竪穴式住居跡〔第4図HY12, 第2図版〕

8区の第III層面を不整橢円形状に堀り込んで構築され、西東方向に長軸を求められる。長径は4.8m、短径3.5m、深さ12cmを有す。西南部には地床炉がある。北東の壁直上に自然礫を置く。

地床炉一床面をポール状に掘ってつくられ、長径52cm、短径40cm、深さ5cmの橢円形を呈す。覆土には、少量の炭火物を含む。焼土は、ほとんど検出されなかった。

覆土一壁面付近では、縦位の堆積状況をなし、中央部にかけてレンズ状に堆積している。8枚に分れ、II層、III層の微砂質土が主体をなす。

壁一東側はゆるやかに立上り9cm、西側はやや直角に立上り12cmを計る。南、北側は東西の中間的な形態を示す。壁面は微砂質な為に、若干崩れている。微砂質なので排水は良好である。

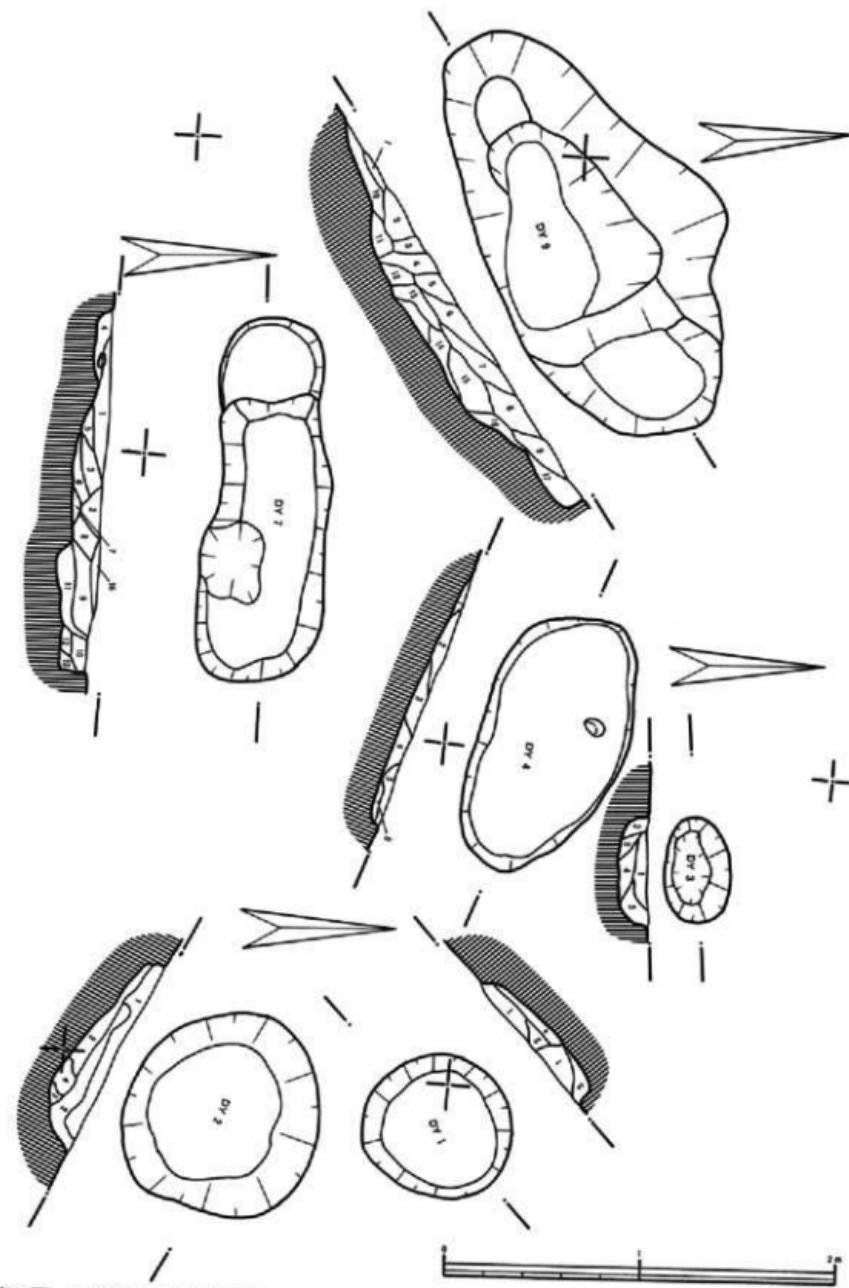
柱穴—T Y15～T Y20の柱穴を床面、壁下に置き7本付随する。深さは10cm～30cmであり、円形、橢円形を呈す。

遺物—住居跡の床面より、波状口縁部片が1点とa⁹形態、a¹⁰形態の剥片各1点が出土している。土器片は他に5点出土しているが磨滅が著しい。

年代—縄文時代前中期に比例する住居跡であり、米沢市では八幡原No.24に次で2例めである。

・竪穴状遺構〔第3図〕

10区の北側に位置し、平面形狀は橢円形を有す。長径5.7m、短径3.0m、深さは5cm～10cmでレンズ状を呈す。内部には大形狀の礫を含む10個の自然礫（安山岩）が認められ、東側に集中している。この礫群の周辺からは39点のチップ類が出土している。チップの形態はa²類2点、a³類1点、a⁷類1点、a⁸類1点、a⁹類3点、a¹⁰類7点、a¹¹類2点、b¹類4点、b²類1点、b³類2点、b⁴類1点、b⁵類1点、b⁶類3点、b⁷類7点、b⁸類3点。



第4図 白旗遺跡土壤平面図 (DY1・2・4・7・9) PY3

本遺構は、当初竪穴住居と考えられたが、床面となる底面や竪穴状遺構周辺からも関連するピット群は確認されなかった。これらの吟味によって竪穴状遺構とした。

性格としては、自然の凹面を利用した石器作業場としたい。年代はHY12と同年代にしておく。

・土壙〔第3図DY1・2・4・7・9・11, 第4図〕

土壤群の中で、DY11は第I層の耕作土が多量に混入しており、近世の遺構である。ゴミ捨て穴を示す遺物が出土している。最近まで使用された痕跡を残す。

他は平面プランが円形及び長円形を示すもので6基確認されている。いづれも浅く、自然堆積による状況を示す。いづれも遺物は含まれていない。

縄文前期末に位置するグループと考えられ、今回検出された竪穴式住居跡と関連を持つものと思われる。次に各土壤についての説明に入る。

DY1は7区に位置し、長径76cmを有すほぼ円形状を呈す。深さは12cmと浅い。断面形態はポール状を示す。覆土は4枚であり、いづれもやわらかい。DY2はDY1と南北に並んで存する。平面形状は、不整の円形状を有し、長径100m、深さは22cm～12cmを計る。

底面は、南から北に傾斜し、ポール状をなす。覆土は6枚に分れ少量の礫を含む。両者とも性格は不明である。

8区～9区にかけて、DY4, DY7が70cmの幅を置いて南北に位置する。DY4は北西より東南に長軸を有す。長径140cm、短径72cmを計り、深さは8cmと浅い。覆土は6枚に分れ、底面には礫が1個認められた。

DY7は東西に長軸を有し、190cmを計る。短軸は66cm、深さは12cmと浅い。層位の堆積状況より3基の土壤が重複する。これを整理すると最も新しいグループが覆土の2・8・16・9・11次に1・4そして3・5・6・7・10・12・13となる。

3区、4区にDY9がある。北西にやや張り出しを有する長円形を有し、長径部は2.3m、短径は1mある。底面は凹凸であり、壁面も不正に立上る。この土壤の底面より、松の木の樹皮を検出した。これらの状況より、DY9は松の木が自然に風化して出来た自然遺構といえる。

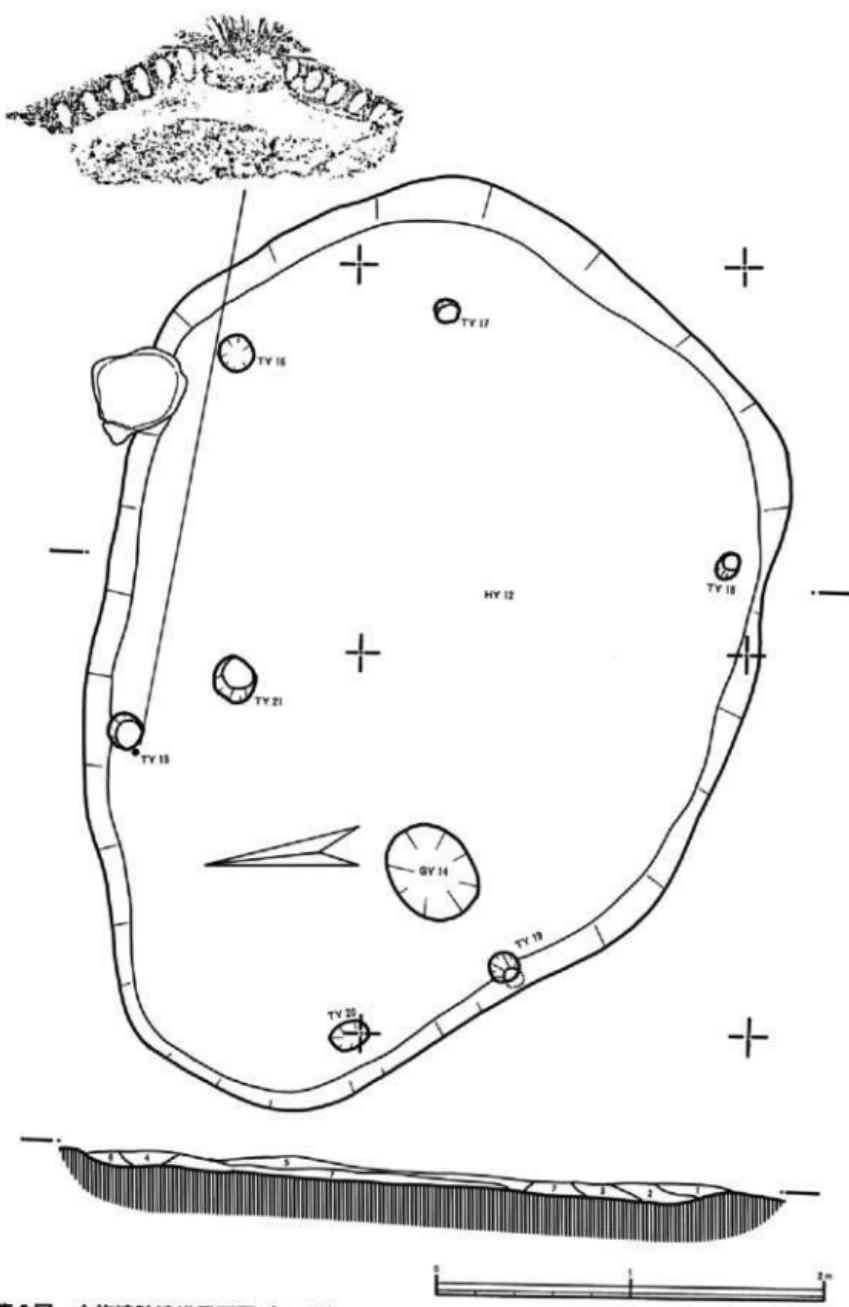
・ピット群〔第3図PY3～PY6・PY8・PY10〕

平面形状が円形、横円形を有し、長径24cm～32cm、短径14cm～16cm、深さ12cm～25cmと浅いのが特徴である。覆土は1枚～3枚に分れ、暗黄褐色が主体をなす。

遺物は、土壤群と同様にはほとんど含まれていない。これらの遺構群は7区～10区に集中しているが関連性は見い出せなかった。

5. 遺物の概要

本遺跡の調査区からの出土遺物は土器片71点、石器109点であった。遺物は第II層、第III層、遺構からの検出である。土器片は磨滅を有するものが過半数を占め、年代が判別出来るのは32点に



第5図 白旗遺跡遺構平面図 (HY12)

すぎない。32点のうちA群I, II類土器（縄文早期中葉）11点、B群土器（縄文前期末葉）4点、C群土器（縄文中期後葉）15点、D群土器（縄文後期初頭）5点となる。

石器は完成石器3点、他は剥片類で占められ、チップと呼ばれる剥片が主体をなす。完成石器は、I群石器（石鎌）1点、II群石器（尖頭器）1点、III群石器（石錐）1点に分類される。剥片類はa形態、b形態に大別でき、a形態は51点、b形態55点であった。なま石器の分類については米沢市埋蔵文化財報告書第6集33頁と同第7集24頁～26頁を参照願いたい。

遺物は3区～10区にかけて広く分布するが、特に密集しているのは8区～10区の地域であり、同地区は遺構も集中していることから、この両者は密接な関係を示すものといえる。

6. 石器〔第6図～10図、第3図版〕

出土した石器109点について実測図を作図、第2・3表に形態分類表、第4・5表に計測表を作成した。これらの石器群の出土状況は、II層46点、III層24点、遺構出土41点、(X Y22, 39点、H Y12, 2点)となる。形態別に見るとa²類3点、a³類2点、a⁴類3点、a⁵類2点、a⁶類2点、a⁷類4点、a⁸類4点、a⁹類10点、a¹⁰類15点、a¹¹類5点、a^x類1点、b¹類13類、b²類2点、b³類8点、b⁴類8点、b⁵類1点、b⁶類13点、b⁷類7点、b⁸類4点、I群h1類1点、II群a1類1点、III群a3類1点であった。地区別では、III区2点、IV区7点、VI区2点、VII区3点、VIII区26点、IX区23点、X区4点となる。次に各形態別の石器について説明したい。

a. I群石器〔第6図1、第3図版〕

III区II層面より1点出土している。I群石器のh1類に細別した石器であり、基部両端が欠損しているが、いわゆるアメリカ型石鎌と呼ばれる形態を呈す。基部に抉りを有するのが特徴である。

この形態と類似する石鎌としては、八幡原遺跡No24や成島遺跡（表面採集）に認められるものであり、從来より弥生時代の所産と言われてきた。

本遺跡の石器は、欠損品であり、年代については言明を避けたいが、おめきって言うと縄文時代の範疇と考えたい。

b. II群石器〔第6図2、第3図版〕

X Y22からの出土であり、II群石器a1類に細別した。尖状を意図的に作り出した石器であり、尖状部は両面調整によって整形している。基部は平坦であり、無調整の形態を有す。素材に選出した剥片の打点面に調整を加えている。たいがいの場合は基部に打点面があり、尖状部を作り出しているのに、わざわざ加工しにくい打点面に尖状部を整形している。このため、縦断面でも観察できる様に尖状部が肉厚の形態を有す。

c. III群石器〔第6図3、第3図版〕

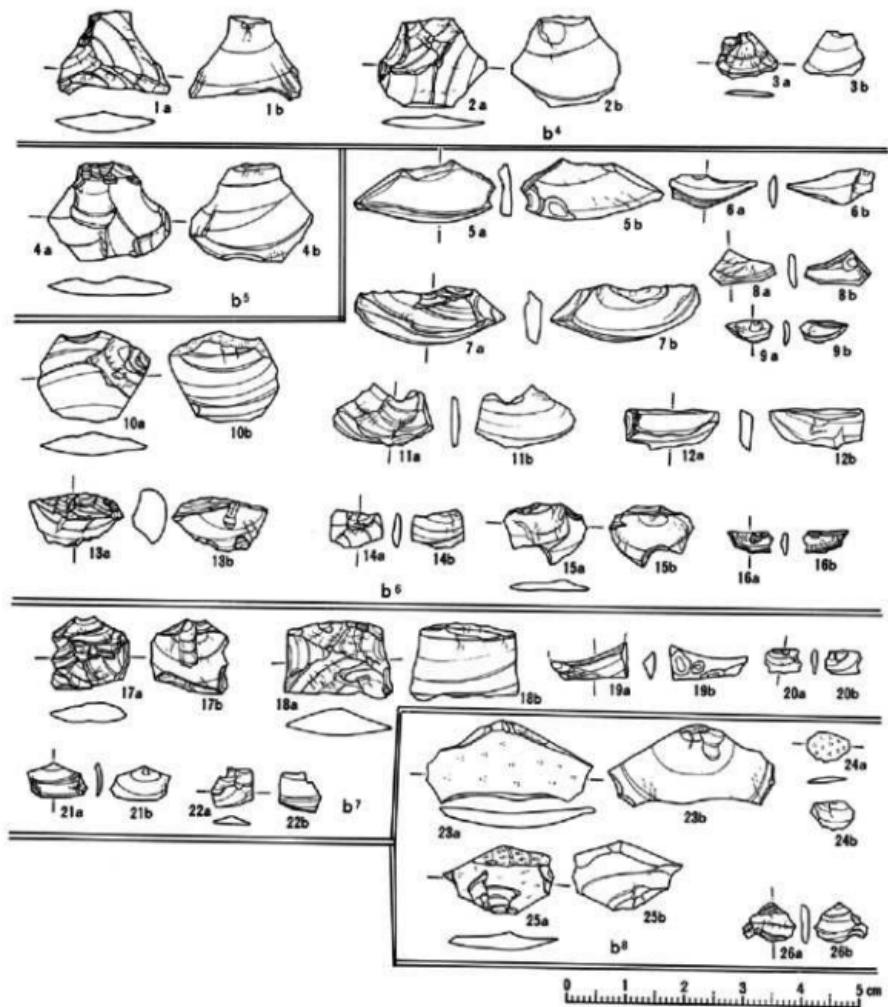
9区第III面より1点出土しており、尖状部、先端に使用痕を有す。頁岩性の小形自然礫に片面から簡単な調整を加えただけの石錐である。縁辺に対しては、つまみ部調整に若干、剥離を加え



第6図 白旗遺跡出土石器実測図(1)



第7図 白旗遺跡出土石器実測図(2)



第8図 白旗遺跡出土石器実測図(3)

た他は、無調整の形態を有す。

d. 制片の細類

出土した制片類すべてについて、観察をおこなった。a類、b類に大別さらにa類(縦形制片)はa¹～a¹¹類の11形態、b類(横形制片) b¹類～b⁸類の8形態に細類を加えた。以下これらの制片について述べたい。

a²類形態制片〔第6図4、第10図1・2〕

4区II層1点、XY22より2点の計3点が認められる。10図1、2石核より剥離された制片であり7図4は、制片調整の際に生じる制片である。1、2の縁辺には若干土調整が加えられているが石器として使用されたものではない。すなわち、石器として調整されずに破棄された制片である。

a³類形態制片〔第6図、第10図3〕

XY22、1点、4区II層1点がある。10図3は6面のバルブ面に集中して調整を加えているが他の縁辺は無調整である。

a⁴類形態制片〔第6図6、第10図4・5〕

7区～9区II層より各区1点づつ出土している。a⁴類、b³類の制片形態は偶然によるものと意図的な場合の両者が推定される。またこの制片を形態をうまく利用し、II、III、a bに、簡単な調整を加え、作業縁辺を構成する石器は、桑山遺跡群の制片石器などにしばしば認められるものであり、剥離された、制片素材に応じた使用や、調整を加えていることをうかがわせる。

a⁵類形態制片〔第6図7・8〕

8区、II、III層より各1点出土しており、両者とも1cm未満の制片である。本類制片の中で大形状は別として、今回出土した1cm未満の形態は、押圧剥離によって生じる制片と考えたい。

a⁶類形態制片〔第6図10・11〕

9区III層から2点出土している。6図10は制片中央部が盛り上がり、打点を有す。この事はこの制片が、石器製作課定において、制片素材の稜線に位置していた事をうかがわせる。

a⁷類形態制片〔第9図6、第6図12～14〕

8区II層より2点、XY22・1点、9区II層より1点出土している。本類の小形制片はa⁵形態同様に、押圧剥離の際にできた制片としたい。基部が尖状を有することから当然様の剥離工具が推理されよう。

a⁸類形態制片〔第6図9・15・16、第9図7〕

XY22より1点、9区II層より2点、IV区II層1点の検出した。9図7は、大形を有する制片で、基部両面にバルブ面を有し、先端が曲る。剥離調整は、打面から先端に対して、加え、縦長の剥離面を持つ。縁辺に対しての微細な剥離は認められない。

a'類形態剝片〔第6図17~24, 第9図8・10〕

4区III層1点, 8区II層1点, 9区II層4点, XY22・4点が検出している。a¹¹形態に次いで2番目に多く認められた形態である。9図8は、両面調整の形態を有し、直線的な縁辺を持つ。

a"類形態剝片〔第6図25~33, 第7図1~4, 第9図12〕

3・4区II層各1点, 8区III層2点, 9区II層1点, 同III層1点, XY22・6点となり, 最も出土数の多い形態である。

a"類形態剝片〔第7図5~8〕

6・9・8区II層より各1点, XY22・2点が出土している。次にb形態の説明に入りたい。

b'類形態剝片〔第7図9~19, 第10図1・2〕

XY22より4点, 8区II層3点, 9区II層4点, 9区III層2点, XY22・4点であり, b形態では出土数が最も多い。10図1は、縁辺調整を加えスクレーパ類であり、縁辺に使用痕を有す。

b'類形態剝片〔第7図20〕

XY22より1点出土している。b¹類とは逆な形状有するものであり、出土数も対照的である。

b'類形態剝片〔第7図21~23, 第10図3~7〕

4・6・10区のII層より各1点, 4区III層1点, 8区III層2点, XY22・1点より出土している。

b'類形態剝片〔第7図24~28, 第10図1~3〕

XY22・1点, II層からは8区1点, 9区1点, 10区2点, III層は, 8区2点, 10区1点である。

b'類形態剝片〔第8図4〕

XY22より1点出土している。b²同様に出土数の少ない形態であり、若干の調整面を有す。

b'類形態剝片〔第8図5~16, 第10図9〕

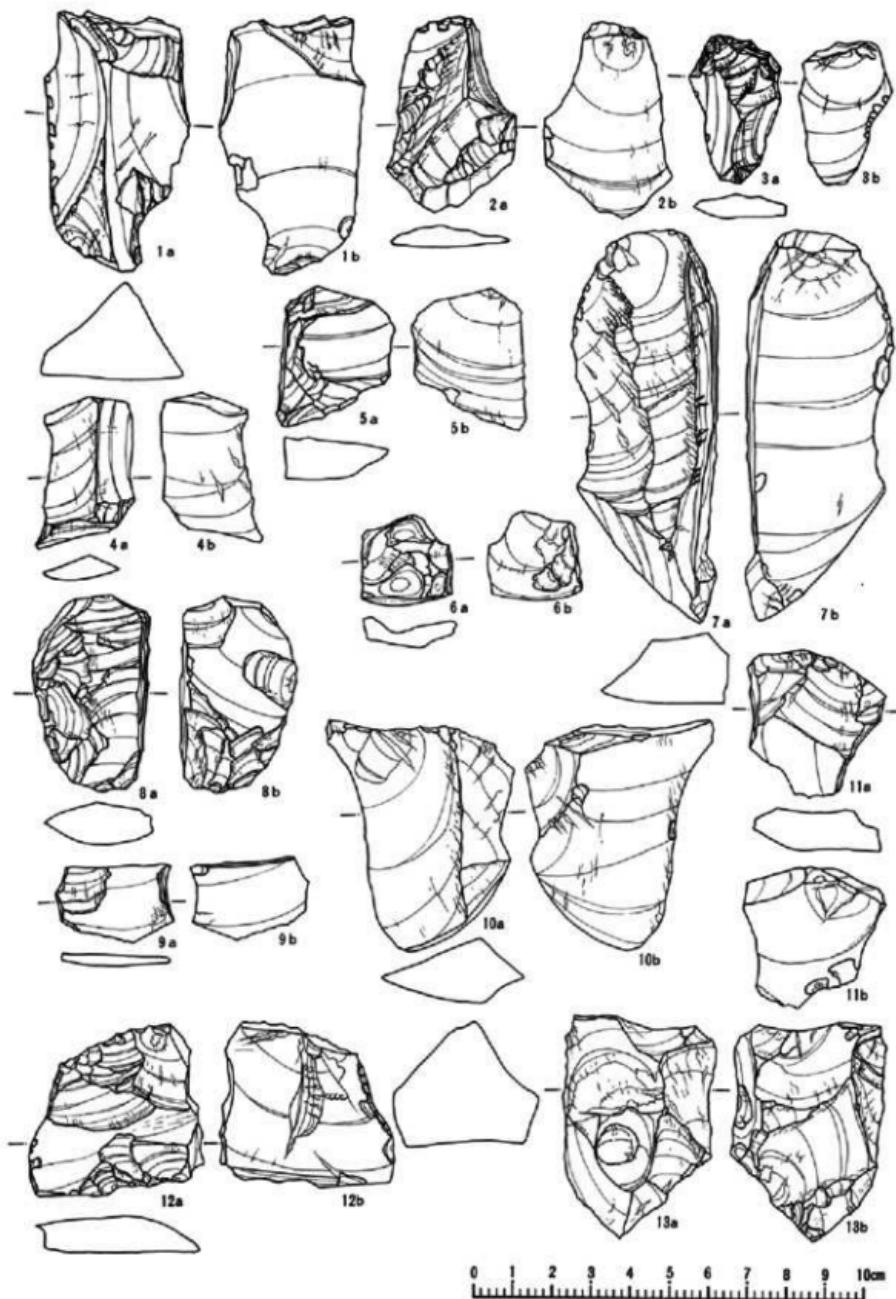
PY5より1点, XY22・3点, II層の7区1点, 8区2点, 9区1点, 8区III層より5点がありb形態は最も出土多量が多く、8区~9区に集中している。

b'類形態剝片〔第8図17~22, 第10図8〕

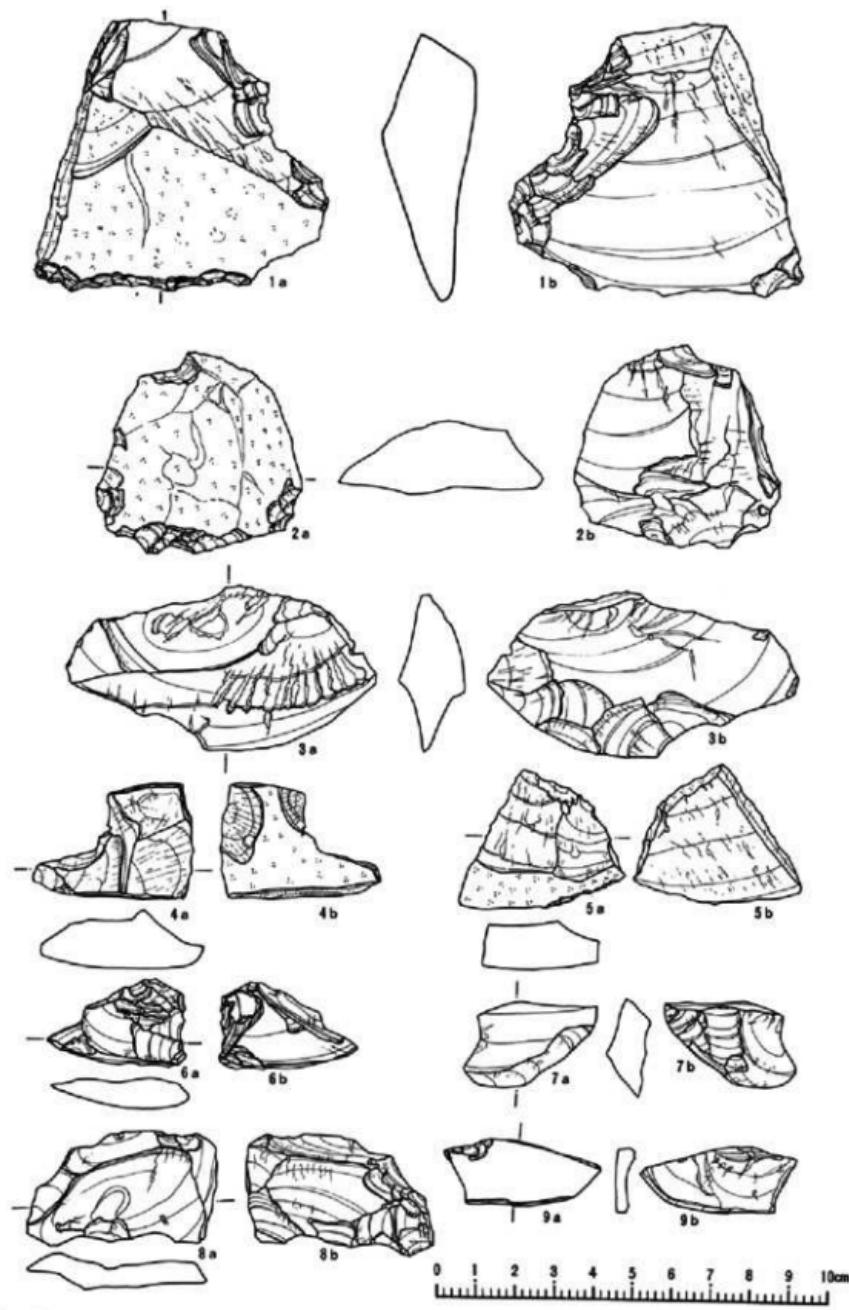
XY22より6点, 8区III層1点が認められた。a¹⁰類と共にXY22の出土剝片に多い形態である。

b'類形態剝片〔第8図23~26〕

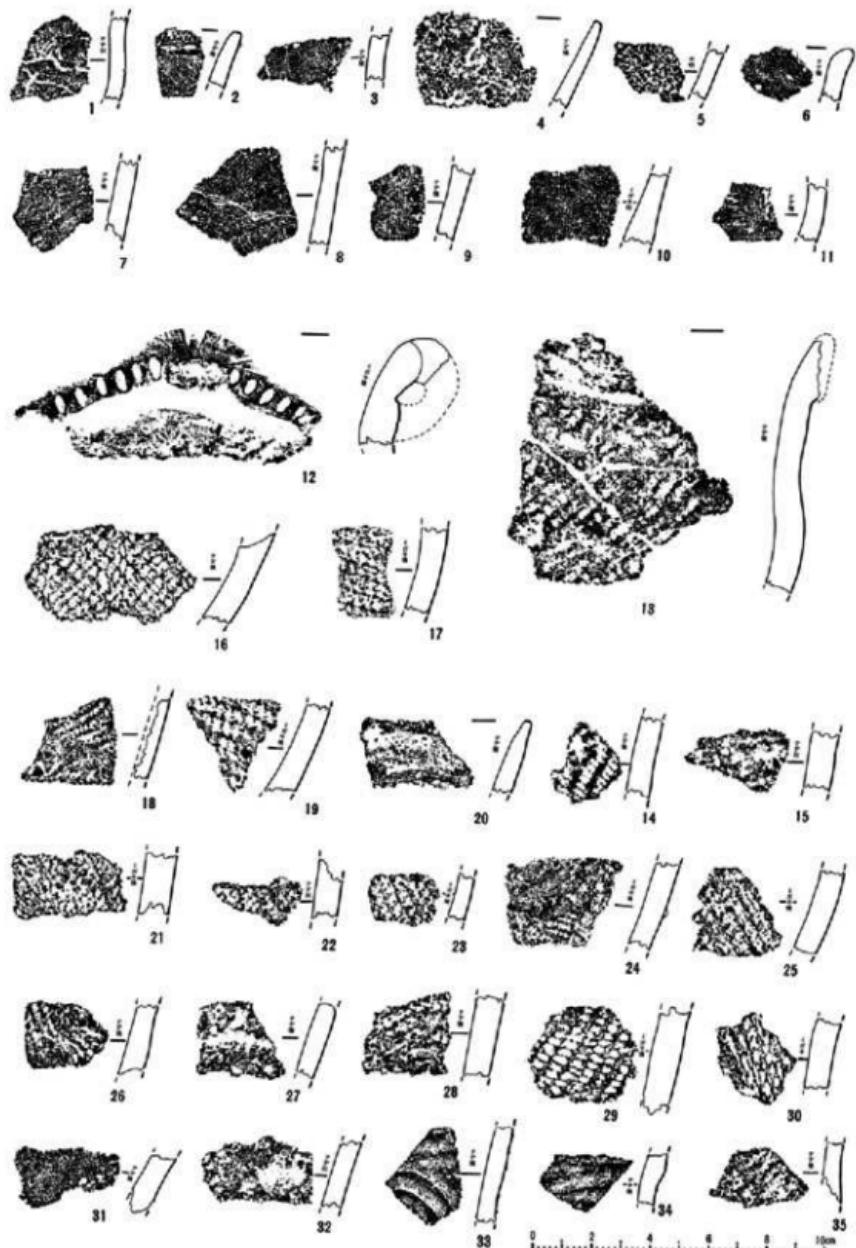
XY22から3点, 8区III層1点がある。b⁶類と共に本類は典型的なb類の形態を有す。



第9図 白旗遺跡出土石器実測図(4)



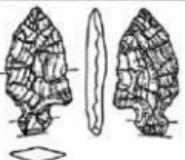
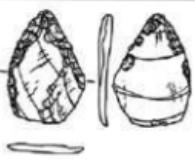
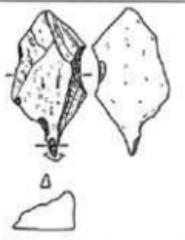
第10図 白旗遺跡出土石器実測図(5)



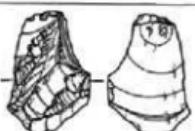
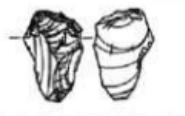
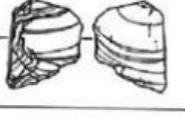
第11図 白旗遺跡出土土器拓影図

1~11商早中期中葉 12~15商文前期末葉 16~30商文中期後葉 31~35商文後期初頭
 A群I・II類土器 B群土器 C群土器 D群土器

第2表 白旗遺跡出土石器形態分類表 I群

		形 態	特 徴	計測平均	持団番号	II層	III層	遺構出土
I 群 石 器	b ¹ 類		基本形は、二等辺三角形状を有す。 特徴は基部にえぐりをもつことである。	長さ(cm) 3.5 幅(cm) 2.7 厚さ(cm) 0.5 重さ(g) 2.0	第6図1	1点		
II 群 石 器	a ¹ 類		調整が簡単な縁辺調整によつて整形していることが特徴である。	長さ(cm) 2.9 幅(cm) 2.0 厚さ(cm) 0.2 重さ(g) 1.0	第6図2		1点	
III 群 石 器	a ² 類		つまみ部は、1次剥離面及び、自然面を有し、鍐部だけを整形している。	長さ(cm) 3.9 幅(cm) 2.1 厚さ(cm) 1.0 重さ(g) 5.0	第6図3		1点	

第3表 白旗遺跡出土剝片分類表

		形 態	特 徴	持団番号	II層	III層	遺 構
	a ² 類		打面が広く、先端にかけて広がる二等辺三角形状を有するものをa ² 類とする。	第6図4 第9図1 第9図2	1点		XY22-2点
	a ³ 類		打面が広面を有し、先端にかけて尖る。二等辺三角形を有するa ³ 類とする。	第6図5 第9図3	1点		XY22-1点
	a ⁴ 類		打面からどちらかに曲するものa ⁴ 類とする。	第6図6 第9図4 第9図5	3点		
	a ⁵ 類		楕円の方形状を有するものa ⁵ 類とする。	第6図7 第6図8	1点	1点	

	形 態	特 徴	排図番号	II層	III層	遺 構
a ⁴ 類		基本的には a ² 類と同様であるが、先端部で大きく丸味を有するもの a ⁴ 類とする。	第6図10 第6図11		2点	
a ⁷ 類		打面、先端部の両端が尖りを有するもの a ⁷ 類とする。	第9図6 第6図14 第6図13 第6図12	3点		XY22-1点
a ⁸ 類		打面が平担で大きくそのままの形状で先端部にかけて尖りを有するもの a ⁸ 類とする。	第6図9 第6図15 第6図16 第9図7	3点		XY22-1点
a ⁹ 類		基本的には a ² 類と同様であるが、先端部がやや丸味を有するもの a ⁹ 類とする。	第9図8 10 第6図17 ~24	6点		HY12-1点 XY22-3点
a ¹⁰ 類		角の強った方形状を有するもの a ¹⁰ 類とする。	第9図12 第6図25 ~33 第7図1 ~4	3点	5点	XY22-6点
a ¹¹ 類		全体が丸味を有する円形状を示すものを a ¹¹ 類とする。	第9図11 第7図5 ~8	2点	1点	XY22-4点
b ¹ 類		打点面が尖り、先端部にかけて広がる正三角形状を有するもの b ¹ 類とする。 第8図9~19	第10図1 第10図2 第7図9 ~19	7点	2点	XY22-4点
b ² 類		b ¹ 類の逆で打点面が、平担で先端部が尖りを有するもの b ² 類とする。	第6図20			XY22-1点
b ³ 類		打点面からどちらかに曲するもの b ³ 類とする。	第7図21 第7図22 第7図23 第10図3 ~7	2点	4点	XY22-2点
b ⁴ 類		打点面がやや広面な舌形状を有するのを b ⁴ 類とする。	第10図1 第7図24 ~26 第8図1 ~3	5点	2点	XY22-1点
b ⁵ 類		基本的に b ¹ 類と同様な形状を呈するが、バルブ付近で両端の曲するもの b ⁵ 類とする。	第8図4			XY22-1点
b ⁶ 類		打点面が平担で先端部が丸味を有し、半円形状なもの b ⁶ 類とする。 第8図5~16	第10図9 第8図5 ~16	6点	5点	XY22-1点 PY3-1点
b ⁷ 類		角の強った方形状を有するもの b ⁷ 類とする。	第10図8 第8図17 ~22		2点	XY22-5点
b ⁸ 類		打点面が丸味をなし、先端部にかけて平担な b ⁸ 類の逆形狀を有するもの b ⁸ 類とする。	第8図23 ~26		1点	XY22-3点

第4表 白旗遺跡出土石器計測表（長さ・幅・厚さcm, 重さg）

I群 石器

通しNo	遺物No	持団番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
1	BZ2	第6図1	III区	II	3.5	2.7	0.5	2.0	頁岩	I群h1類	I-IIa+d+R ⁴⁻⁶	基部欠損

II群 石器

通しNo	遺物No	持団番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
2	BZ3	第6図2	XY-22		2.0	2.0	0.2	1.0	頁岩	II群h1類	Ia+b+R ⁵ , IIa+b+R ⁵⁻⁶	

III群 石器

通しNo	遺物No	持団番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
3	BZ4	第6図3	9区	III	3.9	2.1	1.0	5.0	頁岩	a1類	IIIb+R ⁴ , IIb+R ⁹	使用痕有り

第5表 白旗遺跡出土剥片計測表（長さ・幅・厚さcm, 重さg）

通しNo	遺物No	持団番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
1	69	第6図4	XY-22		1.3	1.1	0.1	0.1	頁岩	a ¹		
2	43	第9図1	4区	II	6.5	3.8	2.5	4.6	頁岩	a ²	I-Nb+R ⁸⁻⁹	
3	55	第9図2	XY-22		4.9	3.9	0.6	8.0	頁岩	a ²	IIb+R ⁸⁻⁹	
4	198	第6図5	XY-22		1.4	1.1	0.2	0.1	頁岩	a ³		
5	40	第9図3	4区	II	3.8	2.4	0.6	5.0	頁岩	a ³	III-Nb+R ⁸⁻⁹	
6	168	第6図6	8区	II	1.4	1.1	0.2	0.1	頁岩	a ⁴		
7	44	第9図4	7区	II	3.6	3.1	1.0	11.0	頁岩	a ⁴	III-Nb+R ⁷⁻⁹	
8	67	第9図5	9区	II	3.9	2.5	0.6	5.0	頂岩	a ⁵		
9	192	第6図7	8区	II	0.8	0.7	0.1	0.2	頁岩	a ⁵		
10	166	第6図8	8区	III	0.4	0.2	0.1	0.1	頁岩	a ⁶		
11	201	第6図10	9区	III	1.1	1.1	0.5	0.1	頁岩	a ⁶		
12	187	第6図11	9区	III	0.5	0.4	0.1	0.1	頁岩	a ⁶		
13	56	第9図6	8区	II	2.3	2.4	0.6	4.0	頁岩	a ⁷	IIa+R ⁸	
14	162	第6図14	8区	II	0.9	0.7	0.1	0.5	頁岩	a ⁷		
15	106	第6図13	XY-22		1.5	0.7	0.1	0.1	頁岩	a ⁷		
16	19	第6図12	9区	II	2.1	1.1	0.2	0.1	頁岩	a ⁷	Nb+R ⁷⁻⁸	
17	38	第9図7	4区	II	10.1	3.8	1.8	81.0	頁岩	a ⁸	Ib+R ⁸	
18	68	第6図15	9区	II	2.7	1.8	0.2	1.0	頁岩	a ⁸	Nb+R ⁸	
19	128	第6図9	XY-22		1.1	0.4	0.2	0.1	頁岩	a ⁸	Ib+R ⁸	
20	154	第6図16	9区	II	1.4	1.0	0.2	0.1	頁岩	a ⁸	IIIa-II-Nb+R ⁷⁻⁹	
21	10	第9図8	9区	II	5.0	3.0	1.1	19.0	頁岩	a ⁸		
22	29	第9図10	4区	III	6.0	4.7	1.6	40.0	頁岩	a ⁹		
23	100	第6図19	9区	II	1.1	0.5	0.1	0.1	頁岩	a ⁹	IIIb+R ⁷⁻⁸	
24	14	第6図18	9区	II	(0.8)	1.6	0.3	0.1	頁岩	a ⁹	I-III-Nb+R ⁷⁻⁸	
25	150	第6図24	XY-22		1.9	1.1	0.2	0.1	頁岩	a ⁹		
26	217	第6図21	HY-12		2.1	1.4	0.3	0.1	頁岩	a ⁹		
27	210	第6図17	XY-22		1.1	0.7	0.1	0.1	頁岩	a ⁹		
28	9	第6図20	8区	II	1.3	1.3	0.3	0.1	頁岩	a ⁹		
29	74	第6図22	XY-22		1.6	1.3	0.1	0.1	頁岩	a ⁹		

欠損面有り

通しNo	遺物No	持団番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
30	155	第6回23	9区	II	1.4	1.0	0.1	1.0	頁岩	a ⁹		
31	83	第9回12	4区	II	4.5	4.4	0.9	21.0	頁岩	a ¹⁰	Ha+R ⁷ , III-Nb+R ⁷⁻⁹	
32	75	第7回33	XY-22		1.5	1.3	0.1	0.1	頁岩	a ¹⁰		
33	110	第7回31	XY-22		1.5	1.0	0.2	1.0	頁岩	a ¹⁰		
34	218	第6回28	HY-12	(1.5)	2.3	0.3	1.0		頁岩	a ¹⁰		
35	98	第6回25	XY-22		1.8	1.8	0.2	1.0	頁岩	a ¹⁰		
36	119	第6回26	XY-22		1.5	1.2	0.1	1.0	頁岩	a ¹⁰		
37	165	第6回29	8区	III	0.8	0.6	0.1	0.1	頁岩	a ¹⁰		
38	172	第6回30	8区	III	0.8	0.6	0.4	0.1	頁岩	a ¹⁰		
39	202	第6回32	9区	III	0.9	0.6	0.1	0.1	頁岩	a ¹⁰		
40	62	第7回3	9区	II	2.1	1.7	0.3	2.0	頁岩	a ¹⁰		
41	41	第6回27	3区	II	(1.5)	2.8	0.5	2.0	頁岩	a ¹⁰		
42	107	第7回1	8区	III	2.3	2.0	0.3	1.0	頁岩	a ¹⁰		
43	145	第7回4	XY-22		1.7	1.7	0.3	1.0	頁岩	a ¹⁰		
44	26	第7回2	XY-22		1.8	1.7	0.5	1.0	頁岩	a ¹⁰	II-Nb+R ⁷	
45	183	第7回13	9区	III	(2.0)	3.1	0.3	2.0	頁岩	a ¹⁰ +1C		
46	5	第9回11	8区	II	3.8	3.6	1.0	13.0	頁岩	a ¹¹	I-Nb+R ⁷⁻⁹	
47	70	第7回5	9区	II	2.2	1.9	0.2	1.0	頁岩	a ¹¹		
48	36	第7回8	6区	II	0.6	0.5	0.1	0.1	頁岩	a ¹¹		
49	47	第7回6	XY-22		1.6	1.2	0.3	1.0	頁岩	a ¹¹		
50	134	第7回7	XY-22		1.2	0.9	0.1	0.1	頁岩	a ¹¹		
51	139	第9回13	9区	II	5.7	3.9	3.1	43.0	頁岩	ax		
52	33	第10回2	9区	II	5.1	5.3	1.8	42.0	頁岩	b ¹		
53	8	第10回1	XY-22		7.1	7.5	1.6	105.0	頁岩	b ¹		
54	72	第7回17	XY-22		1.1	2.0	6.4	12.0	頁岩	b ¹		
55	124	第7回12	XY-22		1.0	1.0	0.3	1.0	頁岩	b ¹		
56	51	第7回9	8区	II	1.2	1.5	0.1	0.1	頁岩	b ¹		
57	138	第7回19	8区	II	1.5	2.0	0.3	1.0	頁岩	b ¹		
58	51	第7回11	8区	II	2.5	2.9	0.4	7.0	頁岩	b ¹		
59	130	第7回13	XY-22		1.8	2.3	0.4	1.0	頁岩	b ¹		
60	49	第7回10	9区	II	1.9	2.0	0.2	1.0	頁岩	b ¹		
61	186	第7回14	9区	III	1.9	2.2	0.3	1.0	頁岩	b ¹		
62	170	第7回18	9区	III	1.8	2.0	0.2	1.0	頁岩	b ¹		
63	20	第7回16	9区	II	1.4	1.6	0.2	1.0	頁岩	b ¹		
64	74	第7回15	9区	II	1.0	1.5	0.2	0.1	頁岩	b ¹		
65	142	第7回20	XY-22		1.2	1.3	0.5	0.1	頁岩	b ¹		
66	30	第10回3	4区	II	4.2	8.0	1.6	36.0	頁岩	b ¹		
67	24	第10回4	4区	III	3.6	4.3	1.2	19.0	頁岩	b ¹		
68	35	第10回5	6区	II	3.0	4.1	1.5	14.0	頁岩	b ¹		
69	104	第10回6	XY-22	III	2.2	3.6	0.8	5.0	頁岩	b ¹		
70	51	第10回7	8区	III	2.2	3.4	1.3	2.0	頁岩	b ¹		
71	21	第7回21	XY-22		1.7	2.5	0.3	1.0	頁岩	b ¹		
72	151	第7回22	10区	II	1.2	1.5	0.2	0.1	頁岩	b ¹		
73	194	第7回23	8区	III	1.0	3.5	0.4	2.0	頁岩	b ¹		
74	123	第7回25	XY-22		1.2	1.4	0.1	0.1	頁岩	b ¹		

通しNo	遺物No.	掉区番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
75	190	第8回3	8区	III	0.8	1.1	0.1	0.1	頁岩	b ⁷		
76	114	第8回2	10区	III	1.5	1.9	0.2	0.1	頁岩	b ⁷		
77	102	第8回1	8区	II	1.4	1.9	0.4	0.1	頁岩	b ⁷		
78	101	第7回28	9区	II	0.4	0.5	0.1	0.2	頁岩	b ⁷		
79	52	第7回24	10区	II	1.7	2.1	0.5	2.0	頁岩	b ⁷		
80	125	第7回26	10区	II	0.7	0.4	0.2	0.1	頁岩	b ⁷		
81	163	第7回27	8区	III	0.5	0.5	0.1	0.1	頁岩	b ⁷		
82	112	第8回4	XY-22		1.7	2.1	0.3	0.1	頁岩	b ⁷		
83	66	第10回9	9区	II	1.7	4.0	0.4	3.0	頁岩	b ⁷		
84	219	第8回10	PY-3		1.5	1.9	0.4	1.0	頁岩	b ⁷		
85	108	第8回13	XY-22		0.9	1.6	0.6	1.0	頁岩	b ⁷		
86	60	第8回11	XY-22		1.0	1.7	0.1	0.6	頁岩	b ⁷		
87	55	第8回7	7区	II	1.0	1.7	0.1	1.0	頁岩	b ⁷		
88	77	第8回5	8区	II	1.0	2.5	0.3	0.4	頁岩	b ⁷		
89	9	第8回9	8区	II	1.0	2.5	0.2	1.0	頁岩	b ⁷		
90	199	第8回14	8区	III	1.0	1.5	0.2	0.1	頁岩	b ⁷		
91	164	第8回12	8区	III	0.6	0.9	0.1	0.1	頁岩	b ⁷		
92	160	第8回8	8区	III	0.7	1.7	0.2	0.1	頁岩	b ⁷		
93	200	第8回16	8区	III	0.6	1.1	0.1	0.1	頁岩	b ⁷		
94	113	第8回15	8区	III	0.3	0.7	0.1	0.1	頁岩	b ⁷		
95	147	第8回6	XY-22		0.6	1.4	0.1	0.1	頁岩	b ⁷		
96	72	第10回8	XY-22		2.9	5.0	1.2	1.0	頁岩	b ⁷		
97	126	第8回22	XY-22		0.7	0.7	0.1	0.1	頁岩	b ⁷		
98	149	第8回21	XY-22		0.6	1.0	0.1	0.1	頁岩	b ⁷		
99	134	第8回20	XY-22		0.4	0.6	0.1	0.1	頁岩	b ⁷		
100	144	第8回19	XY-22		0.6	1.4	0.2	0.1	頁岩	b ⁷		
101	213	第8回18	8区	III	1.4	2.0	0.4	1.0	頁岩	b ⁷		
102	156	第8回17	XY-22		1.3	1.4	0.3	1.0	頁岩	b ⁷		
103	205	第8回23	8区	III	1.5	2.4	0.3	1.0	頁岩	b ⁷		
104	185	第8回24	XY-22		0.5	0.7	0.1	0.1	頁岩	b ⁷		
105	21	第8回26	XY-22		0.7	0.9	0.1	0.1	頁岩	b ⁷		
106	50	第8回25	XY-22		1.1	1.9	0.3	1.0	頁岩	b ⁷		

7. 土器〔第11図 1-35、第3回版〕

調査区の東側寄りの8~10区を中心71点が検出された。主に第II層、第III層の覆土中から検出したもので、磨滅が著しく、文様の判別できる資料は僅か45点にすぎない。年代的には縄文早期（A群土器）、縄文前期（B群土器）、縄文中期（C群土器）、縄文後期（D群土器）の4時期の土器がある。

A群土器〔第11図1~11〕

半裁竹管を用いて、斜に鋸歯文を施文するもので、1点ある。明黄褐色を呈し、焼性は悪く、胎土に多量の石英砂を含んでいるもの第11図1・と、一条の隆起線を配し表面を浅い条痕を有するもの2、それに無文土器がある。前者は田戸上層式、後者は野島式に求められ、無文土器は両者と同様に位置付けられる。

B群土器〔第11図12~15〕

4点ある。外反する皮筋口縫部広で口唇部に沿って橢円形状の空隙を有するもの。土木式

C群土器〔第11図16~30〕

15点ある。R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ R \\ L \end{array} \right\}$ ・復節斜縄文片と隆線文片がある。大木9式と考えたい。

D群土器〔第11図31~35〕

5点ある。Lの撚糸文片とL $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の斜繩文片、凹線文がある。掘え内土式と併行するものである。

8. まとめ

今回調査区となった範囲は、白旗遺跡の北端に位置する。直路敷地内に限定された調査にもかかわらず、質的に重要な成果が得られたことは十分評価出来よう。

それらの成果を上げまとめると、一にHY12〔堅穴式住居跡〕は縄文前期末葉の大木5式に比例するものであり、県下でも大石田町の角二山遺跡、遊佐町の吹浦遺跡、米沢市では八幡原No.26遺跡、No.3遺跡その他の数例にすぎない。一般にこの時期は、遺物は少量であり本遺跡に於いても一致する。

遺物の面では、A群I類に分類した田戸上層式、A群II類の野島式土器片が注目され、遺物を持つ意味は大きい。これまでの調査では、縄文早期の特に、中葉期は八幡原遺跡群No.26、桑山遺跡群No.3・4・5法将寺遺跡等と、梓川流域に集中する傾向として考えられていたが（調査対象となる遺跡群が梓川流域に集中している事もあった）、本遺跡からの検出で米沢市南部から東部にかけての広範に分布することが明らかになった。

次にアメリカ型石鎌の出土が上げられる。米沢市内では、2点確認されているがいづれ表採品であり、発掘調査の遺跡からは初めての出土品である。

最後に、炎天下の中で、調査員として動いてくださった山形大学生徒諸兄。いろいろと御協力

をいただいた米沢市農業協同組合に対して、深く感謝申し上げます。

参考文献

- | | | |
|----------------|--|----------|
| 1974 亀田晃明 他 | 「普門院遺跡外3遺跡発掘調査概報」 | 米沢市教育委員会 |
| 1977 秦 昭繁 他 | 「松原遺跡」 | 置賜考古学会 |
| 1987 手塚 孝、菊地政信 | 「米沢市埋蔵文化財調査報告書第6集」
水神前遺跡、柿の木遺跡、ニタ俣B遺跡 | 米沢市教育委員会 |
| 1988 手塚 孝 菊地政信 | 「米沢市埋蔵文化財調査報告書第8集」
ニタ俣A遺跡・八幡堂遺跡 | 米沢市教育委員会 |

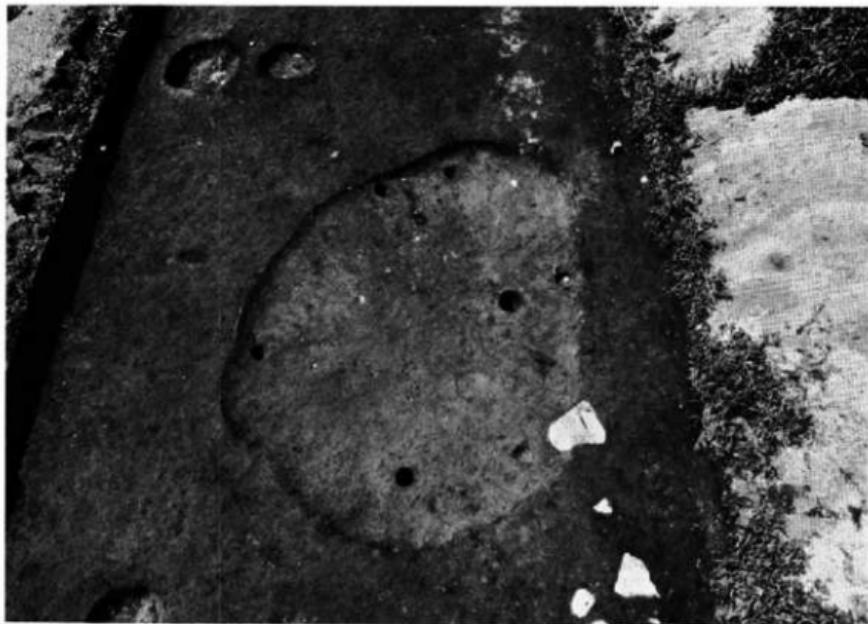
図 版



白旗遺跡発掘区全影（西側より東側を望む）（一）



白旗遺跡発掘区全影（東側より西側を望む）（二）

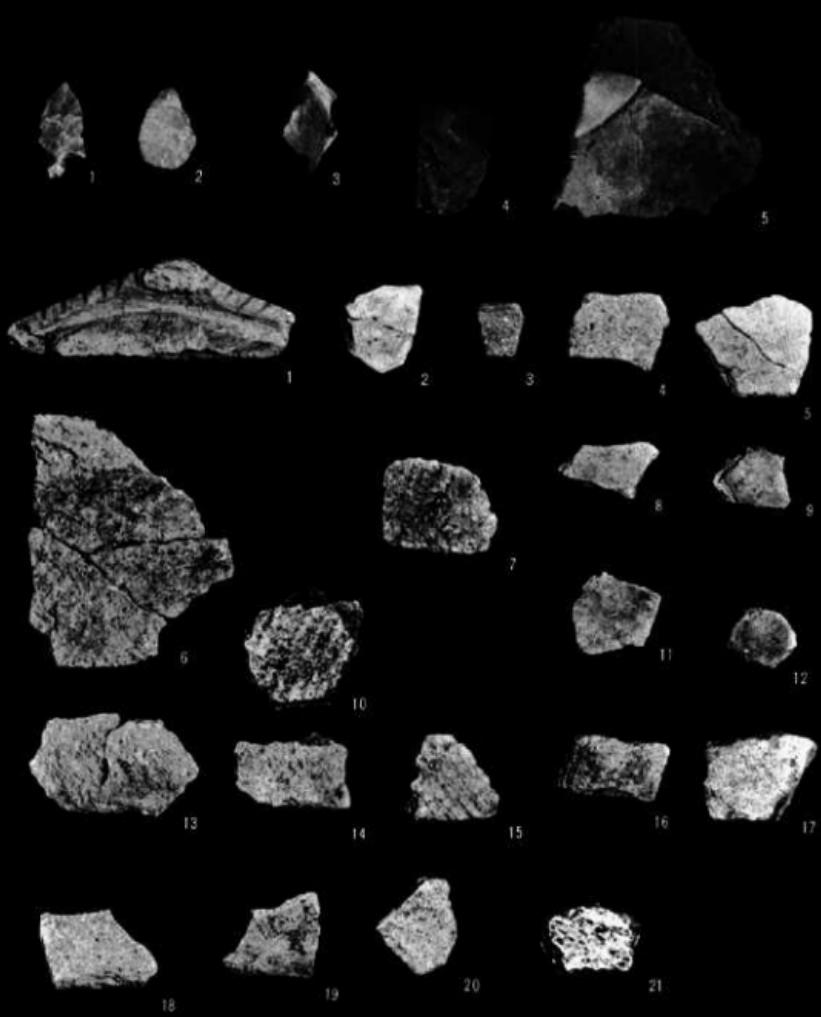


HY12 垂穴式住居跡 (三)



KY13 溝状造構 (四)

第三図版 白旗遺跡出土の土器・石器



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21

昭和60年1月30日発行

白旗遺跡

発行 米沢市教育委員会
米沢市金池三丁目1-14
置賜総合文化センター内

印刷 水井印刷株式会社
米沢市下花沢1-2-16